

NOの場合、次のような方法が考えられる。上記①～④を検討しなおす。特に③が明確にできないときは④を進めることはできない。③ができて④が明確にならないときは研究を進めることができなくなるので、文献、資料の再検討と新しく文献等の収集をする。また、発想の転換を図る。実践結果から仮説の修正が必要になったときは、④から検討しなおす。

□実施段階

実施段階の形式的評価の内容・方法を明確にし実施する。

①事前研究に関する内容・方法を明確にする。

(1)計画段階で作成した研究仮説をふまえ、授業仮説を設定する。(YES, NO 評価)

○評価内容には次のような例が考えられる。

- ①研究仮説の内容を十分理解したか。
- ②事前調査により児童・生徒の実態把握をしたか。
- ③何を解決・改善しようとしているかを明確にしたか。
- ④授業仮説の実践方法等が焦点化されたか
- ⑤授業仮説ができたか。

NOの場合、次のような方法が考えられる。①では研究のねらいを確認し、学習過程の中で検討する。②では、子どもの実態が把握できるように質問紙法や面接法、レディネステスト、SD法、ソシオメトリー、過去のデータ等の分析結果を用いる。③では②を検討しなおす。④では③を検討しなおす。

(2)検証授業案を作成する。

(YES, NO 評価)

○評価内容には次のような例が考えられる。

- ①教材の目標分析等をして本時の指導内容を明確にしたか。
- ②授業仮説を検証するための効果的な授業の進め方(授業の最適化)を意図的に計画したか。
- ③授業仮説に結びつく評価の内容を明確にし、結果の処理方法が科学性に富んでいるか。
- ④①～③を検討した検証授業案ができたか。

NOの場合、次のような方法が考えられる。①では教材の目標分析、既習学習行動の分析、下位目標行動の設定をして明確にする。②ではチェックポイント、指導法、教育メディア、指導形態を検討する。③は何を、何で評価するかを明確にしS-P表、有効度指数等を用いる。④は①～③を検討し綿密な指導案とする。